

# 平成 25 年度

## 高浜市「防災ネットきずこう会」支援事業 報告書



防災ファッションショーにて防災ずきんを披露する子どもたち

[主催]

高浜市

[企画・運営]

特定非営利活動法人レスキューストックヤード

【目的】

東日本大震災の極めて厳しい現実を見せつけられた現状の中、この地に警戒される南海トラフ地震において、いかに「いのち」と「暮らし」を守るかが問われている。その主役は行政ではなく、「市民自身」である。本事業は、2012年度に引き続き、「津波による人的被害をなくす」ことを目標に、以下のポイントを重点として体系的に学習していく。①東日本大震災の実態等から学び、この地域も他人事ではないという認識を深める。②当該地区の地域・学校・企業等が協働すること。③それぞれが主体的に関わること。2013年度は、特に子どもの防災力向上も念頭に置き地域防災力の向上を目指していく。

【対象】市域全体（5小学校区）およびその内のモデル地区（高浜）

【日程・事業概要】

| 日程        | 内容  | 講師   |
|-----------|---|--|
| 6月23日（土）  | 講演会①「その時、地域はどう動いたか」<br>東日本大震災の実体験から地震発生直後から地域が果たすべき動きについて学ぶ | 岩手県陸前高田市消防団<br>米崎分団副分団長<br>大和田祐一氏  |
| 7月23日（火）  | ワークショップ①<br>講演会①での教訓やこの地域における課題を精査し、意見交換を行う。                |  |
| 8月28日（水）  | ワークショップ②<br>避難所運営ゲーム「HUG」を体験。                               |  |
| 10月29日（火） | ワークショップ③<br>「防災ファッションショー」の説明及び、実施にあたるシナリオを作成。               | 特定非営利活動法人<br>レスキューストックヤード<br>栗田暢之・高木雅成   |
| 11月25日（月） | ワークショップ④<br>「防災ファッションショー」の役割分担や当日の行動手順等について協議。              |  |
| 12月15日（日） | 4町合同防災訓練<br>地域・学校・企業等が協働した訓練を実施する。また、訓練中に「防災ファッションショー」を実施。  |  |
| 12月20日（金） | 講演会②「その時、学校はどう動いたか」<br>東日本大震災の実体験から地震発生直後から学校が果たすべき動きについて学ぶ | 宮城県仙台市立荒浜小学校<br>校長 川村孝男氏   |
| 2月19日（水）  | 講演会③「その時、企業はどう動いたか」<br>東日本大震災の実体験から地震発生直後から企業が果たすべき動きについて学ぶ | 東北電力株式会社<br>仙台火力発電所所長<br>安達裕治氏   |
| 3月16日（日）  | 成果報告会<br>パネルディスカッションや基調講演など、1年間の取組みの報告会を開催。                 | <パネルディスカッション><br>高浜市消防団／佐野元信氏<br>高浜市教育委員会／小嶋俊明氏<br>高浜電工（株）／高桑雄司氏<br>高浜まちづくり協議会・総合防災訓練実行委員会／井野代司彦氏<br><br><基調講演><br>名古屋大学減災連携研究センター<br>防災教育アドバイザー<br>近藤ひろ子氏 |

## ●講演会①「その時、地域はどう動いたか」

岩手県陸前高田市消防団米崎分団副分団長

大和田祐一氏



陸前高田市の発災当時と、二ヶ月後の写真をご覧ください。私が住む米崎町も含め、市役所など海岸沿いの建物が津波で被害を受けた。震災前の人口は、24,000人であった。震災で1764人が亡くなった。内217人が今でも行方不明であり、208名が死亡届を出されている。未だ9名の方が、私の身内は死んでいないという気持ちで過ごしている。消防団員としては、熟知たる思いである。陸前高田市の消防団員は、749人中51人が亡くなった。多くの団員は、一般市民の救助をする過程で津波にのまれてしまった。その時団員は、団員としていたのか、一般市民としていたのか、突然の有事の際にはその境目が曖昧だった。半纏や作業着を着て救助活動していれば、団員としての活動と見なされ弔慰金が支払われたが、仕事中に被災し、消防団員たる証を何も身に着けず救助活動していた場合、団員としての活動と見なされない現実があった。

陸前高田市では、平成22年3月にチリ地震津波を経験している。その際、一昼夜掛け津波が迫ってきていたが、浜の人たちは逃げることなく、波が来るのを堤防で見物していた。近づいてはいけないと声をかけるも、なかなか避難しなかった。今回の津波も同じような意識で待っていたのではないかと思う。今回の揺れは、大きい揺れが3回ほど続いた。1回終わるとまた次が揺れて、長時間揺れていた。揺れが治まるとすぐに仕事場から自家用車で、屯所へ向かった。水門は他の団員が閉めており、住民の避難誘導を開始した。開始するまで20分かかった。陸前高田市では、地震発生から津波襲来まで30分以上の猶予があった。すぐに来ないとわかると安心するのか、船を繫留しにくる漁師や物見遊山の住民も堤防にいた。そういう人た

ちへ、高台へ逃げろと声を荒げながら撮影した映像を今からご覧いただく。消防団員として、堤防間で津波が来るのを撮影していたことは、やってはいけない行為だったと自省している。この映像は、津波がどういものであるかと同時に、反面教師として捉えていただけると幸いである。撮影している時間があるなら、一人でも多くの住民を高台へ避難させるのが、消防団員の仕事だと思っている。(映像を拝聴)。

ご覧いただいた映像が津波の第一波である。陸前高田市には、湾口の防波堤がなかった。5mの堤防が張り巡らされているだけだったため、波が弱まることなく、津波は堤防を軽々と越えてきた。土煙を上げながら、家が家を押しつぶすように迫ってきた。比較的新しい家は、二階部分が残るなどしたが、古い家は跡形もなく壊れていった。津波にのまれても泳いで逃げれば大丈夫だと思うかもしれないが、ガレキが行き交う水の中は泳げる状態ではない。映画やドラマであるような、水に飛び込んで救助するという感じでは一切なかった。波が引くと、逃げ遅れた人や二階部分で無事だった人など、とにかく助けなければならぬと思い、目の届く範囲の人を救助していった。そして、団員家族の安否確認も行わなければいけなかった。部隊長として、家族の安否確認を優先させるのか非常に悩ましかったが、申し訳ないが目の前で助けを求める人、目の前で泣いている人のためにできることをしてくれと、隊の団員に頭を下げ、救助活動を行った。救助活動の最中、一人の少女がガレキの上に取り残されていた。引き波が始まりそうだったため、ありったけの消防用ホースを若い団員に持ってくるよう指示し、そのホースを腰に巻きつけ女の子を救助しようとした。幸い大きな角材が浮いており、角材を伝い女の子へ近づいていった。残り2mのところを先に進めず、水量も少なかったため、意を決し水の中へ足を踏み入れた。近くに流れ着いていたライフジャケットを女の子に着せ、抱きかかえようとしたが、地面が畑であり足をとられた。何度も足を引き上げようとしたが、上手くいかなかった。火事場のバカ力というものが出るもので、女の子を抱え救出することができた。女の子を若い団員に預けていると、助けを求める別の声が聞こえた。自宅の二階部分に避難していたおばあちゃんが助けを求めており、若い団員を誘導し救助へ向かった。おばあちゃんを背中に抱え避難させたが、その時のお

ばあちゃんの力は強く、安全な場所まで避難しても、ギョッと掴んで離さなかった。その反面、自分の住む地域で救えなかった命もある。地震以前に有事の際はあそこに避難すれば大丈夫だと、場所を指定し避難するよう話していた。しかし今回、その場所が津波にのまれた。自分自身が指定した避難先で、亡くなった知り合いもいる。その時目の届く範囲の人しか救うことができない、それが救える範囲の限界であった。

できる範囲での救助活動も落ち着き、波が治まりはじめたため高台から下へ降りていくと、ガレキが山積みになり壊滅的な姿がそこにあった。おそらく水門や堤防にご遺体が流れ着いているだろうとは思っていたが、日が暮れ、雪も降り始めたため、申し訳ないが生きている人を優先したいと避難先になっている中学校へ向かった。中学校では、男子生徒に裏山に行き薪を集めるよう指示し、女子生徒には様々な容器を集め、水の確保を指示した。怪我をしていない人には、水に浸かっていない家々を回り、茶碗一杯の米と毛布一枚もらってくるようお願いした。当日は、寒さが予想以上に厳しく、雪が降るとは思っていなかった。中学校も卒業式を迎えるだけであり、教室の暖房も灯油が少ししか入っていない状態だったため、中学生が集めてきた薪を使い、校庭で焚火をして暖をとった。そして、集めたお米を炊き、おにぎりを避難住民へ配布することもできた。その一方で、道路も封鎖され孤立している住民がいることはわかっていた。日が暮れる中、なんとかおにぎりを届けたいと思っていたが、中学校へ避難している住民から、何があるかわからない、あんたたちだけが頼りだからと懇願され断念した。その夜は、目を瞑る人はいるものの、だれひとり寝ている人はいなかった。とにかく寒く、みんなでくっついていけるしかなかった。ビニール袋を探し、それぞれが片方の足や手を入れ、お互いの体温で温めあった。また、衣服が濡れたままの人もいて、冷たい風が体温を奪っていった。せつなく生き残った命をここで亡くしてはいけないという思いだった。

翌日(12日)午前、孤立している住宅を回り、水とおにぎりを届けた。中には動けない高齢者もあり、中学校や安全な場所へ避難させようとしたが、消防団員だけでは人手が足りなかった。後で必ず来るからと約束し、地元住民に協力を呼びかけ、午後から簡易担架などを作り搬送を行った。同時に手足が冷たくなって

いないかなど、健康状態にも気遣った。浸水地域には入るなど、団本部からの指示があった。入るなどと言っても、現場は専行してしまう。行くなどと言われても目の前に助けるべき人がいるのだから、物資を届けなくちゃならない。その思いで私も指示を聞かず動いた。本来なら、団長や分団長の指示を無視することはご法度である。しかし、有事の際の現場は刻々と変わっていくため、その都度どう責任をとり判断していけるのかが、役職に関わらず、消防団員には求められるのではないかと思う。

震災から2日が過ぎ(13日)、団本部と会議が開かれた。米崎分団は1部、2部、3部で構成されており、3部の屯所だけが流出せずに残っていた。米崎分団では、火事があった際はその地域に一番近い屯所に本部が置かれ指揮をとっていた。しかし、津波の際だけは、一番高台にある3部の屯所に本部を設置するよう米崎分団設立当初より決められており、先人の知恵なのだと感謝した。その一方で、壊滅した町の中心部には、市民体育館、市民会館、市役所があった。以前より浸水区域だとされていたが、避難所に指定されていた。1700名近くが亡くなった原因は、一時避難場所と避難所が同一になっていたことが原因なのではないかと思う。一時避難場所は、高台や高い建物であればどこでもよく、波が引いてから避難所へ移動すればよい。チリ地震津波の際も市民体育館に避難していいのか、行政職員の中にも疑問を持った人がいたと聞いたことがある。上司に掛け合ったが、予算も時間もないと一蹴されたとも聞いている。行政は何をしていたのか、ひいてはそこに避難すればいいと言っていた消防団も何をしていたのかという話になる。今回の災害で一番責任が重いのは、行政と消防団ではないかと思う。私がここに避難すれば大丈夫だと教えたことにより、何名か亡くなっていることも事実である。災害時は、最悪の場合を想定し動かなければならないと思う。私自身の教訓として深く焼き付いている。2日目から、避難所の構築も課題として出てきた。分団内で相談し、2部、3部は状況と安否確認、1部は避難所構築する方向で決まった。一部所属の私は、知合いの建設業者の倉庫に行き、大きい発電機とポリタンク、暖房器具をお借りした。また、学校の先生と相談し、救護室や赤ちゃん専用の部屋、女性が身体を拭ける場など、教室を活用していった。また、近くに保育園があり、プ

ロパンガスや給食を作るための大きい釜など煮炊きできる器材が無傷で残っていた。雨風がしのげ、燃料や煮炊きの確保ができ、とりあえずは大丈夫だろうと安心した。避難所の構築をなぜ消防団がやるのかと言われたこともあるが、過去に災害が起きた時は必ず消防団があてにされてきた。あれも頼む、これも頼むと日頃から住民の声を聞く立場でもあった。避難所では、住民に対し3日間は我慢してほしい、情報はどんどん出るから3日あれば支援も届くからと声をかけ勇気づけた。実際の避難所の様子をご覧ください。(映像を拝聴)。このようにテレビ取材も入ってくるようになった。携帯電話も何もかも通信手段が使えない中、避難所の映像をテレビで流すことにより、遠くにいる人への生きているという連絡手段にもなると考えて取材を受けた。避難所の構築もひと段落し、1部も捜索活動に移っていった。

3日目(14日)から、本格的に捜索と道路の開削作業を行った。道路の開削作業は、何よりも優先させなければならなかった。道路もガレキで寸断され、物資などを運搬する方法がなかったからである。中には、ここにご遺体があるかもしれないと思われる場所であっても、ご遺体の回収よりガレキを取除くことを優先させた。現実として、動かしたガレキの中にご遺体があったことも何度かあった。他には、遺体の運搬を行った。消防隊員は、遺体を発見すると立札を立て、消防団員に遺体を運ぶよう指示を出した。遺体の運搬などしたこともなく、運搬してほしいと相談するが、遺体の発見が先だからと断られた。やるしかないと思い、傷つけてはいけなくて丁寧にやろうとするが、日にちが経っており水死体のため皮膚がずり剥けていたりと言葉では表せられない状況だった。中には、目や口がどこにあったかもわからないご遺体もあった。匂いもきつく、脳にこびりつくような匂いであった。顔に出すことも出来ず、戻しそうになるのを堪えながら、毛布などに包み遺体安置所へ運んで行った。当初は、検視官も発見時どこを向き、どのような状態だったかを事細かに尋ねてきたが、1日30体近くのご遺体が運ばれてくるため、把握しきれなくなってきた。そして、警察も手が回らず無法地帯にもなっていた。家々を回っての盗難や置き引き、ガソリン泥棒や強姦なども発生した。警察も頼りに出来ず、自らで自警をするしかなかった。日にちが経つに連れ、バールな

どを持った人が町中をウロウロし始めた。明らかに家に押し入り、金庫を壊し金目のものを持っていこうという姿が見て取れた。見過ごすことができず、職質しバールを取上げたこともあった。また、ガレキを片付けようと火を付ける人もおり、十分な消火栓が確保できないため消火できず、火の手が広がっていくため、火を付けないよう見回りも行った。とにかく備品がない状況が続いていた。消火活動するにも、ホースに穴が開き使用できない。長靴も法被も自前のものしかなく、替えがなかった。補充するよう掛け合うも、数が揃わないので出せないとの回答だった。正直憤りを感じ、胸座を掴んだこともあった。備品がない中でも活動を続けられたのは、県外の同じ消防団員がボランティアで現地入りし、長靴や法被、食料などを提供してくれたからである。その1つの長靴がどれほど有難かったかは計り知れない。ただ、消防団だけが頂戴することはできないため、避難所に一度持っていき、消防団で使用してもいいか確認することだけは忘れなかった。

最後に、東北では「津波てんでんこ」の教えがある。てんでばらばらに逃げろという教えだが、命を守る職務の人間が、目の前の人をほっておいて逃げられるかということ、そうではない。消防団でも20分経ったら逃げろというルールができたが、目の前に助けを求める人がいるのに逃げることはできない。とは言うものの、父親という立場もあり、勇ましいだけが消防団ではないのも事実である。とにかく、自分の命を自分で守ることが肝心であり、逃げない人を逃がすために、消防団員が命を落としてしまう危険性があることを、住民には認識してほしい。また、消防団も住民と話ができるよう、日頃から積極的に地域と関係性を深めていかなければならない。災害時にあてにされるのは、警察でも消防でもなく、消防団員である。頼られる存在であることを自覚し、一層邁進していただきたい。

## ●ワークショップ①

### 「講演会を通して見えた地域の課題」

前回の講演会を踏まえ、各まちづくり協議会（吉浜・翼・高浜・高取・南部）に分かれ、①講演会から学んだ教訓、②各地域の課題、③どのような防災訓練が必要か、について意見を出し合った（一部抜粋）。

#### ① 講演会から学んだ教訓

- ・避難の際は徒歩。率先して逃げるのが重要
- ・被害想定を把握し、行動をイメージする
- ・津波は怖い。一刻も早く避難が必要であり、恥を捨ててダッシュで逃げる！
- ・自分の命は自分で守る精神
- ・消防団と地域のつながりの強さ
- ・人命第一。素早く避難すれば命は救われる
- ・一時避難場所と避難所の区別の必要性
- ・安否確認や情報把握の必要性
- ・避難する際は大声を出し、近隣にも避難していることをアピールする

#### ② 各地域の課題

- ・一時避難できる高台が少ない
- ・住宅密集地であり、倒壊すると避難が困難
- ・低地に企業が多く、企業職員がどのように避難するのかわからない
- ・海岸線から距離があり高台。近隣を受入れる体制作りができていない
- ・津波より揺れと火災が心配
- ・避難できる高台がどこなのか不明
- ・高齢者が多く、対策が必要
- ・消耗品や備蓄品の確認ができていない
- ・自分は大丈夫だと思っている住民が多い
- ・安全な場所に防災備蓄がされていない

#### ③ どのような防災訓練が必要か

- ・企業との連携は必要
- ・避難所となる場所で、消防団との連携イベント
- ・高台であり、他地区からの避難者を受入れる訓練
- ・介護系の施設の利用者を巻込んだ訓練
- ・避難場所への避難ルートを各々が考えられる訓練
- ・隣同士で安否確認し避難する訓練
- ・子ども会に働きかけ、親子で参加できる訓練
- ・津波避難訓練後の避難所体験を組み合わせる
- ・仕事場からの津波避難訓練

## ●ワークショップ②

### 「避難所の課題」とHUG（避難所運営ゲーム）体験



1995年の阪神・淡路大震災当時の避難所でのインタビュー中継の映像をご覧ください。今では、個人情報保護の観点などから、このような避難所や被災者の声をメディアを通して聴くことは難しい。（映像を見る）。備蓄されている毛布は少なく、近所から持ち込まれたものも多い。また、寝ているようでも目をつむっているだけで、熟睡できていない。とても静かな空間だが、体育館のフロアに入りきれない人は、アリーナ席で寝ていたり、人がごった返している。一方で子どもは無邪気に遊んでいるが、心の痛みは相当なものではないかと感じる。そして、別室にはご遺体が運び込まれ、嗚咽が聞かれる場面もある。また、帰る家がなく避難所に行くしかない現実もある。救援物資もすぐ届くとは限らない。乳児の泣き声も最初は助かったという思いから、みんな温かい目で見守るが、数日経つと泣くたびにギロツと睨まれ、母親は寒空の中外にあやしに行くしかない。乳児を抱える母親が集まれる別室を用意してあれば、気兼ねすることなく面倒を見ることができる。その発想や工夫ができるかどうかは、地域の自治に任されている。

2007年の中越沖地震は、夏場の災害であり暑い日が続く中での避難所生活だった。避難所ではトイレ事情も申告な課題として挙げられる。仮設トイレなどが設置されるが、和式であり高齢者には辛いものがある。熱中症なども心配なため水分を取らなければならないが、トイレが怖い存在となり水分を取らない避難者も出てくる。災害は弱者をいじめると言われるが、災害という緊急時に日頃の課題が顕著になるだけであり、高齢者などの災害時要援護者支援や地縁など、日

頃からの課題が浮き彫りになっているだけである。過去の災害から学び、その学びを地域にどう還元していくのかを考えていかなければならない。また、ライフラインも途絶することも考えられ、電気で動くものだけでなく、いわゆる昔ながらのレトロなものも必要性も見直され始めている。

命を守る取り組みは、災害直後だけではない。取り留めた命を避難所生活で亡くしてはならない。震災関連死を防いでいく必要がある。夏は暑く冬は寒い、プライバシーはない、過度なストレス、トイレや風呂などの衛生問題、バリアフリーでないなど、日常生活とはかけはなれた劣悪な環境が避難所の現実である。多くの人がいる中で一人が風邪を引けば、高齢者や子どもなど体力的に弱い立場の人間にうつっていく。阪神・淡路大震災では、60歳以上の高齢者が関連死の9割を占め、心不全・心筋梗塞、肺炎が原因で亡くなっている。また、避難所の区画整理にも同様のことが言え、元気な人ほど早く避難所に到着し、生活しやすいスペースを確保していく。遅れてきた高齢者は、窓際や廊下など寒さ厳しい場所しか確保できなかった事例もある。高齢者を始め、障害を持った世帯や先に述べた乳幼児世帯、中区にも多くお住まいの外国人世帯など、福祉的な視点を持って避難所の区画整理をしていかなければならない。区画整理の上手さが地域力の差でもある。弱肉強食の避難所であってはならない。東日本大震災では、発災直後に支援に入った仲間が石巻市で道路にて声をあげる老人に呼び止められた。食料をわけてくれと頼まれ、積み込んでいた食料の半分を差し上げた。震災から4日経っており、それまでどうしているのかと尋ねると、恥ずかしながら流れ着いたものをみんなで分けて食べていたとのことだった。また、ある地域では、みんなにマンマ食わせねばならねえと、それぞれが鍋や食材などを持ち寄って炊出しを行った地域もある。

様々な場面で地域力が試されるのが災害である。災害で混乱する中でできることは限られるため、事前に準備や予測をしていなければならない。避難所という環境の中で命を守るためにも、地域力の向上に努めていっていただきたい。

## ▼HUG体験の様子



### ●ワークショップ③④「防災ファッションショー」の説明及び、実施にあたるシナリオ作成。役割分担・当日の行動手順等についての協議

本年度のモデル地区を高浜地区とし、自助と子ども防災をテーマに、4町合同防災訓練で「防災ファッションショー」を行うこととした。

### ▼防災ファッションショーとは

名古屋市災害ボランティアコーディネーター養成講座の修了者らで構成する「なごや災害ボランティア連絡会」が啓発事業として考案。防災・減災に関するアイデアグッズを演劇風に紹介していき、広く多くの方々が参加して実施する。

### ▼説明・シナリオ作り・アイテム確認



### ▼出演者台本読合せ・アイテム作り



### ●4町合同防災訓練

地域・学校・企業等が協働し、防災訓練を実施。訓練内で、「防災ファッションショー」を披露した。出演者は、高浜まちづくり協議会のメンバーと、高浜地区内の小中学生により構成された。また、ゲストとして吉岡初浩市長も出演された。

### ▼挨拶・趣旨説明・出演者紹介



### ▼まくらもとセット





▼身近にあるもので応急処置（新聞紙、ラップなど）



▼高浜市指定ごみ袋合羽



▼防災ずきん



▼防災無線（MC A無線）



▼防災ベスト



▼ShakeOutの実施



### ●講演会③「その時、企業はどう動いたか」

東北電力株式会社仙台火力発電所所長

安達裕治氏



みなさまご周知の通り、2011年3月11日に東日本大震災が発生し、当社も津波による被害を受けた。また、発電所内の震度計では、震度6強を観測していた。あれだけの地震だったが、火力発電設備への致命的なダメージはなかった。致命的なダメージとは、例えば再開するまでに数か月以上かかるというような意味である。東北地方は、昔から地震が多い地域である。主な地震を見ると、昭和39年・新潟地震、昭和43年・十勝沖地震、昭和53年・宮城県沖地震昭和、日本海中部、三陸沖、宮城県沖、平成15年・宮城県北部地震と、東日本大震災の比ではないが、数々の地震に直面してきた。東北という地で動く火力発電設備は、倒壊や致命的なダメージを受ける度に対策をとってきた。今回もそれが功を奏したと思われる。津波対策については、特に被害は出なかったがチリ地震津波の経験もあり、敷地面底を高くしたり、防潮堤を張り巡らせたりし、対策と検討は行っていた。ただし、500年、1000年に一度あるかないかと言われる東日本大震災のような津波に対しては、防ぎきることはできないという見解であった。ただし、ダメージを受けたとしても、再起動するまでの時間を短くできるように減災の考え方を基本として対策を考えていた。再起動までの優先順位を明確化し、優先順位とは別に、公衆環境に影響を与えるような危険物に関しては、倒壊しないよう設備を固定、高台に移設するなど、対策を実施している。入社時から叩き込まれている精神があり、電気を供給する発電所はなるべく停めない、停まってもなるべく早く立ち上げる、と叩き込まれてきた。災害時の運用対策として、非常災害対策実施マニュアル

を整備していた。その中には、津波が来たら発電所に駆け付けなければならない、ということがマニュアル化されていた。しかし、発電所が位置する津波の迫る海岸線に駆け付けることは、危険極まりない。今回の震災を機に、津波警報がでた際は発電所に来ず、高台にある社員寮にまず集まるなど、高台への避難を明確に定めるように変更した。

これから、被害と当時の動きについて実際の映像や写真を交えながら、お話しさせていただく。仙台火力発電所は、最大出力44万6千キロワットで運転中だった。14時46分の地震の震動で、運転中だったタービンが自動的に停止。その後、15時51分に津波が襲来した。発電所は海面から3メートルの高さに位置していたが、8mの高さの津波が押し寄せ浸水した。当初は松島湾側から浸水してきたが、その後、海に面している全ての場所から浸水していった。実際にビデオで撮影した映像をご覧ください。(所内から撮影したビデオ映像を拝聴)。敷地内の駐車場を映した映像である。ガスの燃料配管に社有車がぶつかり、従業員駐車場でもあるため、自分の車が流されるのが見え、嘆きの声をあげている。遠くに民家が多数見られるが、全て流されている。室内の状況ですが、仙台火力発電所は比較的新しい発電所のため、書棚などは固定しており倒れることはなかった。撮影場所は、建物の3階にあたる。通常の建物だと4階か5階くらいの高さにあたる。このような映像が残っている理由の一つに、発電所では災害時に備えていろんな役割を前もって決めている。その役割の一つに映像記録班というのがある。担当者は、誰に指示されるでもなく、自分で考えて記録を残すために動いてくれたため、映像として残すことができた。

発電所には緊急地震速報システムが完備されている。それに伴い、所内では緊急地震速報が鳴った際の対応マニュアルも定めていた。そのマニュアルは、当社の従業員だけでなく、所内に入出入りする様々なメーカー社員や工事業者にも、入所教育として必ず徹底していた。また、所内に避難先の地図などを貼り、避難先の徹底も行っていた。震災当日も緊急地震速報が所内に周知され、所内にいる人間は地震の身を守り対応した。その後、津波が来ることがわかり、所内放送を使用し避難を呼びかけた。放送担当者からは、津波が到達したら放送は止めてもいいかと問われたが、到達

後も引き続き呼びかけるよう指示を出した。そして、従業員を始め所内にいた人たちの安否確認を並行して行った。電気の供給を停めないことが使命でもあり、安否確認は、復旧に向けた所内の体制確保ということも含まれていた。地震後は、自動的に非常体制に入り、災害対策本部等を設置し、本店や消防・警察と連絡を取り合うようにしていた。しかし、津波が来てからは消防も警察も不通状態が続き、呼び出しをしてもなしのつぶてであった。様々混乱した状況ではあったが、速やかに避難が完了し、幸いなことに死者・負傷者はゼロで乗り切ることができた。このような結果になったのは、日頃からの備えもあるが、実は東日本大震災の2日前に震度5弱の揺れに襲われていた。その際も緊急地震速報が鳴り、念のため避難行動を行っていた。その行動があったのも、速やかに避難行動に移ることができた要因かもしれない。震災直後の電源の状況は、非常用の常設の発電機があり確保できた。そして、予備の発電機も設置してあったのだが、唯一の課題は燃料確保がままならないことだった。小分けの燃料タンクはあったが、そのタンクを使い切ると、後はもうバッテリー一次第という状況だった。通信については、保安電話という特有の設備があり、電話会社を通さないため、どのような非常時でも使用できる状態にあった。本店との連絡は、バッテリーが確保できる間は取り合うことができた。公衆回線としては衛星電話を整備していた。携帯電話は、基地局自体が津波の被害を受けていたこともあり、すぐに使えなかった。当日は、ラジオやワンセグ放送で情報を入手していた。心配事として、燃料の他に水が上がった。飲料としてだけでなく、トイレをどうするかということも課題として大きかった。食料については、上階に備蓄していたこともあり確保することができた。このような状況の中、社内でも一夜を明かした。

2日目となり、設備の状況把握のため写真を撮りに敷地内を廻った。配管の上に車が乗り、1階に設置されていた電源室には、泥、砂、海藻などが散乱していた。水が抜けきっていない場所や、建物の壁が津波の水圧で抜けている場所もあり、階段には、ここまで来たであろう津波の線があった。発電所には、様々な危険物や高圧線もあるため、最初に点検し二次災害防止を図った。その日は余震はあるものの、大事に至るような出来事もなく時間が過ぎていたが、22時頃隣に位

置する燃料会社で爆発的な火災が起きた。バーンという爆発音を発し、発電所の窓がガガガガと揺れ恐怖だった。その爆発で町から避難命令が出され、発電所から避難せざるをえなくなった。5日後に火は消えましたが、それまで発電所には立ち入れなかった。避難命令が出た後、備蓄食料などもその場に置いてくるしかなく、確保に奔走した。飲み水、食糧については、若い従業員に行朝早くから様々なスーパーに並んでもらい確保した。また、帰省のために日本海側に帰っていた社員が何人かおり、水と米を車に満杯に積み戻ってきた。全国の電力関係の会社からも応援いただき、今まで以上に支えられながら生きていた。震災から日が経つと、各自の自宅に戻る従業員も多くいた。その際課題になったのが、各自の交通手段である。多くの従業員が、発電所から2キロ圏内に住んでおり、当面は徒歩通勤であった。自家用車が津波で流されてしまったことも要因の一つであった。次第に、レンタカーも手配できるようになり、何とか手配したレンタカーを交通手段や社用車として利用した。遠方の従業員は自転車で90分かけ通勤する者もいた。さすがにそのような状況を長期間強いることはできず、同一地域の者同士でレンタカーを借り、相乗りし出勤するよう様々な手を尽くした。そのような状況の中、運転再開に向け点検を進めていった。まずは泥かきが至上命題だったが、道具も流されており道具集めからのスタートだった。泥かきと共に、引き続き危険物の安全点検は怠らなかった。

復旧に向けて進める中、最終的なインフラの復旧は、電気が1~2週間、水道は1ヶ月かかった。発電所も復旧の目途が付きはじめ、運転の再開を平成24年の6月と定めた。しかし、少しでも早くという声もあり、平成24年2月まで早めることとなった。そのような中、冬場の供給力に何とか貢献したいという気持ちが従業員の中であり、所内では、それよりも早い平成23年12月発電開始目標を密かに持っていた。従業員の頑張りもあり、平成23年11月17日に送電線から発電所が受電を開始した。これには大きな意味があり、電気が通ることで大型のポンプやファンの試運転が可能になった。これが送電線から供給ができないうちは、いくら復旧しても試運転ができない。そして、試運転や点検を繰り返し、同年12月20日に震災後始めて電力を出力できた。これで所内で立てた目標を達成

できたと感じた。年が明けた1月5日には、定格出力44万6千キロワットに到達し、震災以前と同様の電力供給量に戻すことができた。

話しは変わるが、自治体への協力についても話させていただく。発電所が立地する七ヶ浜町とは、震災後2日目から連絡をとっていた。我々から町役場の方へ出向き、「何かできないか、困っていないか」と、我々も困っている状況ではあったが、町と対話をしながら復興のためできることをしたいという思いだった。それは一重に「地域と共に発展しましょう」という、当社の基本理念があり、従業員全体に浸透していたからでもある。町から依頼されたことは、ガレキが山のように出るため、その集積場所に発電所の土地を借りられないかということだった。当社としても貸与に当たり、様々な機関と交渉をしながら、土地を貸与することができた。このガレキの集積場所は、七ヶ浜町の早期の復興に大きく貢献したということで、今でも町長始め多くの方々に感謝されている。また、小学校のグラウンドに仮設住宅が建つため、グラウンドとして使えるよう発電所内の土地を一部売ってくれないかと打診された。その土地についても様々調整し、無償譲渡した。他にも、田んぼが塩害を受けており、除塩作業のために工業用水を分けてほしいという話もあった。本来工業用水の外部提供はできない規則だが、これについても様々調整し、除塩作業のために工業用水を供給した。自衛隊の遺体捜索の際にゴム長靴が足りないという話や、ポンプがないため水が出せないという話もあり、器材の貸与なども行った。器材に限らず、町民へ向け、飲料水や食料品、日用品、ガソリンや灯油などの燃料についても、当社から最大限に協力させていただいた。発電所独自としても、仮設住宅全戸に支援物資を従業員が手渡しで提供したり、ガレキの撤去に協力した。

最後となるが、まずは復旧への体制についてお話しさせていただく。個別の事業所だけでは、早期の復旧は難しいのが現状である。そのため、会社全体、関係会社などと普段から念密に連携を取って相互に協力していく必要がある。また、緊急事態だからこそ、方針や目標は、間違っていたとしても早い段階で立てた方がよい。方針があれば、そこに向かってみんなが進み、様々な意味でスムーズに一致団結し進んでいくことができる。あとは情報。情報は、正しい判断のため

に正確な情報が必要となってくる。社内外や地域の被災情報を積極的に掴みに行かなければならない。我々も実際に七ヶ浜町役場に出向き、情報を取りに行った。備えという観点では、「衣・食・住」と言いたい所だが、「衣・食・トイレ」という実感がある。トイレは簡易のものでも構わないので、何かしら準備しておいた方がよい。心の備えも重要で、今回の震災や様々な災害から、いざという時にどう動くべきかのイメージを持っておく必要がある。また、災害発生直後は消防・警察・自衛隊が助けに来ないと思い行動するべきである。実際に我々も、震災当日は自分たちで出来ることは、とにかく何でもやらなければならなかった。そして、自分たちの仕事に関し性質をよく理解し、緊急時だからこそ必要とされる企業の強みを見出していかなければならない。

震災の年の10月3日に、所内の桜が花を咲かせた。この桜は、津波に曝された桜であり、まさか咲いてくれるとは思わなかった。この桜を復興の桜とし、今でも所内で大切にしている。我々は自然から想像もできない被害を受けた。しかし、咲いた桜を見た時は本当に嬉しく、自然が復興に向け応援してくれているのだと心から思った。

## ●成果報告会

開会挨拶後、1年間の活動を振り返ったDVD上映が高浜市より行われた。その後、各登壇者によるパネルディスカッション、高浜子ども防災リーダーの活動紹介、名古屋大学減災連携研究センター 近藤ひろ子氏から基調講演をいただき、成果報告会を閉幕し、1年の全活動を終了した。

## ▼高浜市都市防災グループによる活動振り返り



## ▼パネルディスカッション

### <登壇者>

- ・高浜市消防団 副団長 佐野元信氏
- ・高浜市教育委員会 副主幹 小嶋俊明氏
- ・高浜電工(株) 社長 高桑雄司氏
- ・高浜市まちづくり協議会  
総合防災訓練実行委員会 井野代司彦氏

### <コーディネーター>

- ・特定非営利活動法人レスキューストックヤード  
代表理事 栗田暢之



**栗田** 高浜市の今年度の取組みは、いわゆる訓練をするという形ではなく、東日本大震災からしっかりと学んでいこうという一年間であった。もちろん訓練もあったが、基調講演を通し様々な角度から東日本大震災の現状をとらえ、次の災害に備えようという取組みであった。陸前高田市の消防団員、仙台市の荒浜小学校の校長、七ヶ浜町にある東北電力火力発電所の所長といった豪華メンバーにお越しいただき、高浜市内で同様に従事されている関係者の方々に講演を拝聴いただいた。今回は、各関係者を代表し登壇者のみなさまに感想等をお聴きする。

まずは、陸前高田市消防団米崎分団副分団長大和田氏の講演を受けての感想や教訓を、高浜市消防団副団長の佐野さんにお伺いする。

**佐野** 大和田副分団長の話聞き、いろいろ衝撃的だった。東北3県の消防団員の死者数が253名と聞き、消防署員や警察官の犠牲者数と桁が違い、消防団員の死者数が圧倒的に多いことに心が痛んだ。消防団は津波襲来時、逃げる市民に逆らって海岸に向かう。それが消防団の使命であり、仕事でもある。東日本大震災での消防団員の死亡原因は、市民の避難誘導中に津波

にのまれた方が全体の50%を占めている。中には、「逃げなくてもいい」という住民を説得しており、一緒に津波に巻き込まれた消防団員もいる。逃げない住民を置いて自分が避難するわけにはいかないという消防団員も数多くいた。ここで究極の選択に迫られる。私は、消防団員は死んではいけないと思う。消防団員が亡くなるとは、住民を守る存在がいなくなるからである。これは美談ではなく、消防団員の命もひとつの命。亡くしてはいけない命だと、私は思います。消防団員は非常勤という特別地方職であり、地方公務員という形で年額数万円という報酬で働いている。大災害が起きれば、数日に及ぶ消火活動、救助活動を行い、捜索活動に至っては、数か月にも及ぶと思われる。消防団をもっと地域の人に理解してもらい、ぜひとも消防団を盛り立てていただけるようにしていきたい。

**栗田** 大和田さんの話を振り返ると、できることは全てやられていた。避難所の世話やご遺体の捜索も含め、地域を一番よく理解している地元の代表者であり、動かざるを得なかったということもある。そして、津波で流された家の金庫がこじ開けられるなど、様々な事件も発生し、地域や避難所の自警にもあたったと言及されていた。非常に厳しい状況が伝わってくる講演だった。佐野さんのお話にもあったように、消防団員が253名亡くなっている。水門を閉めに行ったり、「俺は逃げん」と言った人を説得する時に亡くなった消防団員がいる。佐野さんは、消防団は死んじゃいけない、という言葉が深く心に残っておられ、消防団のことをもう少し地元が理解してほしい、というようなご要望も出された。大和田さんの話もすごかったが、その後の懇親会もすごかった。大和田さんも非常に豪快な方で、どうしても消防団は飲んでばかりのイメージがある。そういう所も含め、地域に愛着をもった高浜市消防団となるべく、これからも活躍していくことが最大の学びだということであった。

それでは、教育委員会の小嶋先生、荒浜小学校の校長先生のお話をお聞きしいかがでしたか。

**小嶋** 今回、貴重なお話を伺える機会を頂戴し、教育委員会としてどのような形で活かしていくのか話し合った。年末の慌ただしい時期ではあったが、市内の小中学校すべての先生が参加できるよう取計らった。それは、3.11を他人事とせず、高浜市の子どもたちの命をどう守っていくのか、また、子どもたちが自分で

判断し、自分で行動できるようにするにはどのような防災教育が必要なのかを、高浜市の課題として捉えたからである。

講演会で印象に残っていることは、講演会開始早々に映された自衛隊撮影の記録映像である。中でも、暗闇の中、校舎屋上で寒さや恐怖に怯えながらヘリコプターの救助を待つ子どもたちの姿をみて、言葉を失った。また、川村校長の言葉で印象に残ったことが4つある。1つ目は、子どもの命を何としても守るという先生方の使命感と責任感。2つ目は、いざという時に本当に必要な備蓄物、また支援物資とは何かという点。3つ目は、教育再開した今でも学校で課題となっている、子どもたちの心のケア。4つ目は、震災直後、避難される方々の多さにより、学校側が行おうとしていた児童の引渡しに混乱を招いたという事例である。実体験や教員の視点で語られており、私自身があの時その場にいたら何ができたのだろうか、と重ね合わせながら聞いていた。

高浜市教育委員会として、子どもの命を守るために取り組んでいることがある。災害発生した時に、学校職員が最優先にやらなければいけない3つの業務があり、1つ目は子どもの安否確認。2つ目が安全確保。3つ目が一日でも早い教育再開である。この3つを高浜市内の教員に明確に打ち出していくために、今年度4月に学校防災検討委員会を立ち上げ、活動してきている。その中で今年度は、2つのマニュアルを作成した。1つ目は、非常時の参集体制の確立。高浜市教職員の約半数が市外から通勤している現状がある。以前は各々が自分の住む市町村の避難所などで、各人の責務を果たすという方針であった。しかし、今年度より、高浜市として先ほどの3つの業務を行えるよう勤務校に参集するという体制を確立した。2つ目は災害対策マニュアルの作成。これまでの学校の避難訓練は、授業中が主だった。しかし、地震はいつやってくるかわからない。子どもの登下校中、休日中などを想定し、子どもたちが自分で判断して行動できるようなマニュアルを作成した。更に校内のことではないが、もう一つ作成せざるを得なかったものがある。それは、避難所開設運営の支援マニュアルである。学校は市の避難所に指定されており、開設は行政の職員が行うことになっている。しかし、阪神・淡路大震災の時も、東日本大震災の時も、行政職員が駆け付ける前に多くの避難

者が学校に駆け付けてきている。避難所に指定されているのは体育館のみだが、中には校舎のガラスを割られ、鍵を壊され、教室だけでなく保健室や家庭科室の備品を無断で使われ、中には校長室までが無法地帯となり、争いやトラブルなどが絶えなかったという事例も聞いたことがある。管理責任者である学校は、教育再開のために学校施設や子どもの個人情報を守らなければならない。しかし、現実には体育館だけの避難所開設では難しく、校舎が臨時の避難所となる場合やどこまで使用していいのか、その時のルールをどうするのかなど、柔軟な方針を立てておく必要がある。更に言えば、目の前にいる避難者に対し、人として人道的に対応していかなければならない。避難所運営が軌道に乗るまでは、学校職員も本来優先すべき3つの業務を果たしながらも支援していくことが求められている。そのため、どんなことが想定されるのかを今から考えておくべきであり、行政職員の力を借りたり、市民会議で市民代表の方、保護者代表の方々から意見をいただきながら、学校・行政・地域の3者協働体制で年4回の防災委員会を開き、マニュアル作成の検討をしてきた。そして、名古屋大学減災連携研究センター防災教育アドバイザーの近藤ひろ子先生にもご指導ご助言をいただき、何とか形にすることができた。今回の講演が、学校防災に対する教職員の意識を高めることに繋がったのではないかと感じている。

**栗田** 元々教育界には様々な課題があるが、その課題の一つとして防災が上がったのが2000年くらいからである。今から10年以上前のことであるが、学校もどのように防災を進めていけば良いのか非常に大きな課題であり、中々進まなかった現状がある。ところが東日本大震災以降その流れも変わってきている。川村校長も荒浜小学校の校長に組織内の決定で着任されただけであり、決して防災のプロではなかった。しかし、教職員の判断は子どもたちの命を左右する。川村校長の判断は、絶対に子どもたちの命を守るということに徹されていた。そのような実体験を高浜市内の教職員に聞いていただけたことは、とても素晴らしいことである。ただ、川村校長の話はあくまでも成功事例であり、実際には、小学生が何十名も命を落としている悲惨なケースもあることを忘れてはならない。マニュアルは、あくまでもマニュアルであり、その都度の判断が求められていることに変わりはない。是非こ

れから子どもと地域と一緒に防災訓練を行える場面を増やしていただければと思う。率直にお聞きするが、高浜市の小中学校は本当に大丈夫なのか。

**小嶋** 高浜市内の小中学校は千差万別で、港小学校のように海拔1mに位置する小中学校もあれば、高浜小学校のように海拔16mに位置する小中学校もある。学区ごとに置かれている状況が全く違い、学校対策マニュアルも学校の実状に合わせたものを作ろうと目指している。

**栗田** おっしゃる通り、それぞれハザードが違う。特に高浜市は震度7の揺れを観測する予測も出ている。揺れに本当に耐えられるか、学校が大丈夫でも地域社会が大丈夫か、火災が起きたらどうするか、様々な観点から一つ一つ考えていくことが大切となる。

**小嶋** 実状を知るための調査についても、学校では手が出せない部分もある。行政の力添えがあると心強い。

**栗田** 危険を一つ一つ丁寧にチェックし、まずは子どもたちが安全に登校できること。そして、学校は子どもたちだけでなく、いわゆる地域社会にも開放しないといけない部分もあるため、学校教育との折合いをつけながら、避難所としてどう対応できるかということも実践され、教育委員会として素晴らしい取組をされている。

次は企業の立場から高桑さんにお伺いする。同様に衝撃的な話だったが、東北電力の安達所長の話はいかがだったか。

**高桑** 私も電気工事に携わる仕事をしており、話を聞き思ったことは、発電という部分で、災害後1日でも1時間でも1分でも早く復旧をし、皆さんに電気を送るという使命感を強く感じた。また、地震に対して過去の経験から様々な取組をされていたという話も伺った。講演の中で一番すごいなと思ったことは、基本理念として「地域と発展しよう」という理念をお持ちだったことである。我々も小さな電気屋ですが、地域の一企業として同じ想いをもち日々取組んでいかなければならないと痛感した。また、企業自らが地域や自治体へ足を運び、できる支援を模索する姿勢も見習いたいと思った。

我々は、地域の企業として高浜市と防災協定を結んでいるが、話の中で特にそういう協定があったわけではないと話されていた。協定がなくともあれだけの貢献をし、電気を送るという使命感の他に地域のいち早

い復興を考え、電気と地域の2本立てで取組まれており、ただただ頭が下がる思いである。普段から地域と関わりを持ちコミュニケーションを取っていたと話されており、ただ防災協定を結んで終わりではなく、企業としても行政や地域の行事に積極的に参加をしていく必要性を感じた。企業同士も同様で、それぞれの業種の強みを活かし何ができるのか、情報共有が必要だとも感じた。同じ方向を向き、それぞれが取組むことで本当に早く復興できる。

**栗田** ライフラインの会社は、安全意識や一日も早く復旧しなければいけないという使命感が大きい。東北電力という生活になくはならない電気を生み出す会社が被災し、火力発電所は復旧が早いと言われながらも、復旧までに一年以上かかっている。講演の中で安達所長が言われた「地域と共に発展していく」とか「地域に貢献しながらの火力発電所」という言葉。その理念に高桑さんも共感された。私の感想は、東北電力の所長は大物であると思うが、極めて冷静に一つ一つ対応されたと思う。本当はパニックになっていてもおかしくない状況である。津波が襲ってくる風景も映像で拝聴したが、まさにあの場面を見て冷静でいられるわけがない中、極めて冷静な判断をされていた。記録班を予め決めていたなど淡々と話されていたが、そのような事前の準備、災害時に社員がどう行動すれば良いかという教育も丁寧に行っていた結果だと感じる。また、所長が社員の気持ちを気遣うような、そういう温かさがとても印象深かった。高桑さんの会社は、電気を作る会社ではなくて、電気の工事をする会社であり、中部電力が頑張っても、高桑さんの会社が頑張らないと電気が届かないということになるが。

**高桑** その通り。送電線までが中部電力の管轄であり、建物の中やそれ以外の場所は、我々電気工事屋の管轄である。

**栗田** 電気工事の業種間で、災害に対応するために意気込みなどを話し合う機会はあるか。

**高桑** 電気協力会というのがあり、この地域では高浜市と碧南市が一つの電気協力会となっている。その会の中で、中部電力も含め防災訓練等を実施している。ネットワークもあり、どのような動きをするか地域性もあるため、話し合いは行っている。

**栗田** 震度7の地震で生き残る自信はありますか。

**高桑** 絶対に生き残ります。

**栗田** 消防団員の佐野さんも消防団が死んではダメだと言っていたが、教育も消防団も同じように、企業の方々も地元の大切な命を守る一躍を担っている。絶対に生き残っていただきたい。

これまで高浜市みなさんのそれぞれ力強い言葉をいただいていたが、井野さんは消防団や企業とかではなく地域のいいおじちゃんとして、子どもたちに囲まれながら、ほのぼのとした防災訓練を行われたが、いかがだったか。

**井野** 12月に「高浜市まちづくり協議会」「防災ネットきずこう会」、「高浜の防災を考える市民の会」、「子ども防災リーダー養成講座」を中心に、高浜小学校の体育館で4町合同防災訓練を実施した。350名の集客を予定していたが、当日は、250名の方参加いただいた。防災訓練のテーマを「自助と子ども防災」とし、「子ども防災講座」を訓練内で行った。そして、今回のメイン企画は「防災ファッションショー」という企画であった。将来を担う子どもたちが、少しでも防災に関心を持てるようにと企画した。子どもたちが防災について考えると、両親や祖父母など、子どもが動けば大人も動き出すことができ、防災の輪を広げていくことができると思った。防災ファッションショーは、身近にあるもの、例えば高浜市指定のゴミ袋を使用し防寒具を作成するなど、創意工夫が溢れた防災グッズを身に着け、演劇を交えながらグッズを見せていく。スペシャルゲストとして、高浜市長にも怪我人役で出演いただいた。子どもたちも26名登場し、和気あいあいと遊びも交えた楽しい意義ある防災ファッションショーになったと思う。ただ、殆どぶっつけ本番で、初めての試みだったこともありドキドキでした。

**栗田** 子どもに丁寧に焦点を当て、子どもたちに防災を担う人材になってほしいという思いは、学校以上に地域社会が持ってらっしゃると思う。実際にとても力をいれてらっしゃることが活動を通して拝見できた。

**井野** できるだけ防災に関心を持つ子どもたちを増やしていくことで、大人たちも関心を持ち、必要性の再認識をされるのではないかと思う。また、防災や減災は、絶対にいざという時に効果があると思う。

**栗田** 最後となるが、1年間にわたりこの「防災ネットきずこう会」で様々な企画をしてきた。中心メンバーに今日はいろいろとお話をお聞きした。キーワードは、まずは自らが死なないこと、自らがちゃんと生き

残る努力をしていくこと、何より子どもの命をどう守るか、そういうことを学校関係者任せではなく、地域も含め考えていくことの必要性を痛感したと思う。そういう地域の力を企業や消防団、様々な機関が連携し、一層高浜市の地域力を高めていただきたい。

## ▼子ども防災リーダーの活動報告

高浜市の防災を考える市民の会 福島伸一郎氏



ここにいる子どもたちは、今年度「子ども防災リーダー養成講座」を修了した子どもたちである。単年度ではなくて、5年10年先を見据え、これからも子ども防災リーダーを養成していきたいと思っている。子ども防災リーダーの対象は、小学生4、5、6年生を対象としている。今年度は、男子10名、女子17名、計27名の子どもが修了した。養成期間は1年間であり、年4回の講座を実施し、その他にオプションとして高浜市の総合防災訓練への参加や地域の防災訓練への参加もすることができる。まず、2013年4月に南部公民館で市長にもお越しいたご開校式を行った。開校式後に第1回の講座を行い、防災減災の一般的な講座、耐震の勉強、三河地震や伊勢湾台風など過去の災害の勉強も行った。第2回の講座では、体験学習として東日本大震災の爪痕を自分で見て体験した。宮城県七ヶ浜町を訪問し、町役場の職員から津波の様子や被災状況を聞いた。また、実際に被害にあった方たちの話も聞き、非常に貴重な体験をした。そして、仮設住宅に入居されている方々との交流も行いました。高浜市は、瓦の生産地でもあり、ミニチュアの瓦作りを仮設住宅の方々と一緒に行った。最初は緊張気味だった子どもたちも、時間が経つにつれ仲が良くなり、親睦を深めてきた。第3回の講座では、身近なもので作る



防災グッズを使用し、防災ファッションショーへ出演した。第4回の講座では、自分の町を改めて知るためにまち歩きを行った。あいにくの雨だったが、危険箇所や避難先、避難ルートなどを考えながら歩いた。そして、まち歩きでの学びをまとめ、各グループで発表した。昼は非常食を利用し、非常食を食べてみるという経験もした。その後、閉講式にて修了証書を渡し、1年間の活動を終えた。閉講式では、市長と机を囲み懇談会を行い、子どもたちの純粋な気持ちや学びを市長にお願いすることができた。

体験学習として、2014年度も東日本大震災の爪跡を見て回り、被災地の方々と交流をしていきたいと考えている。阪神・淡路大震災や東日本大震災を始めとする過去の災害を決して忘れてはいけないと改めて感じる。「明日は我が身だ」という思いを持ち、自分の命は自分で守り、そして地域の人をどう助けていったらいいかということ、子どもたちには、この養成講座を通じて身に付けてもらえればと思う。皆さまのご理解とご協力を引き続きお願いしたい。

#### ▼基調講演

「いのちを守る防災学習～子どもたちの笑顔のために」  
名古屋大学減災連携研究センター防災教育アドバイザー  
近藤ひろ子氏



本日は、「いのちを守る防災学習～子ども達の笑顔のために～」と題し、お話をさせていただく。私自身、本年度は高浜市の学校防災検討委員会に参加させていただいた。高浜市では、防災担当部局の方や教育委員会、地域の皆さんや学校、そして企業も含めてとてもいいネットワークを作り、いい形で動いており全国的なモデルにも成り得ると感じている。それぞれが与

えられた役割を担い合い、どこが出るでもなく平等な関係で動いていると思う。

2003年に愛知県教育委員会の「親子で学ぶ参加体験型自主防災学習」という、県下8校の中の1校として、当時勤めていた美浜市の布土小学校が選ばれた。布土小学校は、1学年1クラスの用務員も入れスタッフ13名の小さな学校だった。本当にこの小さな学校で防災学習をしていけるかと不安もあったが、強い味方が3つあった。1つ目は地域の人たち。2つ目が素直で明るい子どもたち。そして3つ目が学校のためならなんでもやってやるよ、というPTAの人たちだった。コンセプトを、命の教育と地域ぐるみとし、それが私の防災学習の始まりだった。私自身はその後、常滑市に転勤になり、2011年3月31日に定年を迎えた。東日本大震災は、定年退職の20日前であった。震災当時は、鬼崎北小学校に勤務しており、大きく揺れた。6年生の担任がたまたま出張中だったため、揺れが来た時に急いで3階の6年生の教室まで走っていった。そうすると、教室の中では2人の生徒がうろろうしており、他の生徒は机の脚を下に隠れていた。机の下に隠れている生徒が、「早く机の下に隠れなさい。危ないよ。」と声をかけていた。その2人の生徒は、実は10月と11月に転入してきた生徒だった。長年の経験から、鬼崎小学校でも防災学習を行っていた。それを経験した生徒たちは机に隠れており、防災教育は本当にこういう時に活かされるのだと実感した。

本題だが、南海トラフ巨大地震は必ず来る。しかし、南海トラフ大震災とならないようにと心に留め、私たちは今日様々な所で講話をしている。私は、防災・減災というのは、2つの要素が必要だと考えている。まずは「命が助かる」。これは、その場でまず死なないということ。しかし、それだけではやはりだめで、「みんなと一緒に生き延びていく」という2つ目の要素が必要となってくる。その2つが結び付き、初めて防災・減災だと思う。その一方で、子どもたちに何を手渡していくかも大人には問われている。私は「命・支え合い・自ら動く」だと考える。この「命」というのは、自分の命だけでなく、自分の命も、他人の命も大切にすること。支え合い助け合って生きていくこと。そして、誰かにやってもらうのではなく、自分たちでやろうということである。子どもは希望・未来だ。小学生の子が学校にいる時間を週の予定から計算してみる

と、1・2年生は11分の1。5・6年生は、9.5分の1。平均するとおよそ10分の1となる。そうになると、残りの10分の9は家庭か地域で子どもたちは過ごしているということになる。だからこそ、地域ぐるみでない子どもたちの命は守れないのである。ただし、学校の果たす役割は決して10分の1ではない。学校が地域の核となって果たす役割は大きい。10年後20年後には、地域の中心になってこの地域を支えていく子どもたちのために、地域ぐるみで防災力の向上をしていかななくてはならない。そのような考え方にとって、学校は地域の核として、防災を家庭・地域に発信・受信できる役割にある。あとは、発信・受信しようとする気持ちがあるかないかである。家庭・地域は様々な本当のニーズを学校に発信でき、また組織力でサポートもできる。そのような相互の関係性の中で、防災力は向上してくるのだと思う。学校というのは、一つに命の学習の場である。二つ目に、地域の核として発信できる存在。三つ目に、特に大事であるが、防災の中心になる防災の未来人育ての場でもある。本当の意味で地に足のついた防災力を持った、命を大事にする心をもった防災の未来人は、地域での相互関係なくしてはなかなか育つことはない。

私の防災のテーマとして、防災教育ではなく「防災学習」として取り組んでいる。防災に限らず、全てを大人が教え込むのではなく、子ども自身が学び取っていくことが成長につながっていく。ぜひ、地域ぐるみで命を守る防災学習の提案をしていきたいと思っている。防災学習は、全然特別なものではなく、アイデア次第でなんでもありだと思う。そして、命・支え合いに関する様々な取り組みは、防災に関連していなくともすべて防災学習につながる、というのが私の考え方でもある。防災だけでなく、防災も防犯も交通安全もいじめ防止、虐待防止、ボランティア、福祉など、全ての事柄が命・支え合いに関わることだからである。防災学習の3つのキーワードとして、「眼」「物」「心」を挙げたい。これは、もしここで災害が来たらどうなるだろうということ、子どもたちにいつも意識してもらおう「眼」。「物」は、大人が目線だけでなく、子どもの目線を取入れることもしてほしい。そして、自助・共助・公助がよく言われるが、私はここに互助も必要だと思う。お互い様という考え方によって、できる人ができる事から1つずつやっていけばいいのだ

と思う。また、何事も一步一步だと思う。3つ目の「心」は、先ほどの「命・支え合い・自ら動く」と同様で、これは本当に小さい時から家庭や地域で育てていくしかない。そうでないと、なかなか本物にはならない。本物でなければ、いざという時に役にも立たない。

防災学習の中で、いくつか合言葉を考えている。1つに家の中の安全確認合言葉、「動いてこない、倒れてこない、落ちてこない」の頭文字を取り「う・た・お」がある。また、避難する時の3つの合言葉、「おはしも」。学校にいるときは「押さない、走らない、しゃべらない、戻らない」で「おはしも」である。ただ、東日本大震災を見るにつけ、「おはしも」だけでは子どもたちの命は守れないと思っている。群馬大学の片田教授がお話になる「津波てんでんこ」。それを子どもたちにも伝える必要性を感じている。しかし、学校現場では、その教えは少し困るという声も聞く。学校現場には管理責任があり、災害時には「津波てんでんこ」だから、自分で考えて逃げなさいとしておくことはできないそうだ。そこで私は、避難のケースを2つに分けて考えてはどうかと考え、次の合言葉を考えた。避難時にリードしてくれる人がいる時は、「一生懸命、ついて行く、戻らない」で「い・つ・も」。リードしてくれる人がいない時は、「津波てんでんこ」の考え方で、「落ち着いて、考える、逃げる」で「お・か・に」という合言葉も考えた。これらを元に詩をつけ音楽にのせ、唄いながら踊りながら学べるようにも工夫している。ぜひ、高浜市の子ども防災リーダーのみなさんにも覚えていただき、保育園や幼稚園を訪ね実践してほしい。そのような機会があると、自分たちもやる気になれば、自分たちにも伝えることができると自信になり、役に立つことができるという自覚もできる。また、少し年上のお兄さん、お姉さんから教えてもらうことで、子どもたちも親しみやすいと思う。

防災に完璧はない。場所、時間、その時の状況によって身の守り方や必要なものは違ってくるからである。だからこそ、普段からトレーニングをしておくことで、対応力や行動力が身に付いていく。防災学習は、必ずしもカチツとしたものでなく、肩の力を抜いて取組めばよい。そして、命・支え合いという視点を丁寧にもって取組めば、どんな学習も防災につながっていく。高浜市の子どもを守るため、子どもが主体となった防災学習に今後も取り組んでいただきたい。